1．起業精神の大切さについて

大阪商業大学　学長　谷岡一郎

プロテスタントの倫理

歴史的に見て、「起業」が人生における大きな目標―優先順位の上位―とされた国と地域の代表は、18～19世紀のアメリカ東部、ニューイングランド地方と呼ばれている地域でした。ルターとカルヴァンを始祖とする宗教改革において、「予定説」と呼ばれるプロテスタント住民たちの行動原理がその底にあったそうです（小室直樹『痛快･憲法学』より）。「最後の審判によって、神に救われる人間はすでに決まっているが、それは生きている間の本人には決してわからない」とする教義ですが、これこそが信者をして勤勉に真剣に働かせる結果となったようです。「決まっているが分からない」というのは、実は恐ろしいことで、「自分は救われるに決まっている、なぜならこんなに神に近づこうとしている（がんばっている）からだ」と自分に言い聞かせ続けなくてはならないからなのです。

プロテスタントの教えによりますと、懸命に働いてお金を貯めることや、それを投資（ベンチャー）してより大きな資本に変えていくことは、神の御心に従うこととされました。「皆が（お金と）交換したくなる価値のあるものを世に生ぜしめ、その結果資本が膨らんでも、それは世の中に多くの善き品を送り出したがゆえである」と考えるからです。儲かるほどに善行を重ねた結果とされ、従ってより大きな富を生む再投資もまた、善行の証となるわけです。

社会学者マックス・ウェーバーが分析しましたように、このプロテスタントの教義とそれによる倫理観および行動様式は、ニューイングランド地方の人々をして、アメリカの他の地域（カトリック系の人々）を経済力ではるかに上廻る富の蓄積をもたらしたようです。カトリック系の教義では、富を自分ひとりで貯め込むことは隣人愛に逆らうことだったわけです。

日本仏教の職業倫理

アメリカ、ニューイングランド地方の労働に対する倫理観とよく似た状況が起こったもうひとつの国がありました。山本七平氏の分析によりますとそれは日本、特に江戸後期の日本社会でした。

日本で醸成された仏教は形を変え、江戸期には、それぞれの立場において勤労の精神を持ち、倹約的な生活を続けることで悟りの世界に至り、極楽浄土に昇華することができる、という教えに変化しました。そしてニューイングランドと同じく、（ニューイングランドと違って強迫観念なく）資本主義の素地が生まれたのです。

アメリカにおいて起業は、「新しい価値を生む」、という点で特に重要視されました。ハーバード大やスタンフォード大をトップで卒業する者の多くは、まず自分のアイデアに投資してくれる人を探します。それが無理なら、自分が手腕を発揮できる中小企業に入り、大会社に昇格させようとします。つまり優れた能力を持つ学生の優先順位において、大企業や安定した職業は、比較的下の方に位置しているのです。

残念ながら日本では、依然として安定性が優先されています。それだけに起業教育を研究し、広めようというこのグループの重要性は、どれほど強調されてもされすぎとは思えません。

この「起業教育」が、将来の日本を支える哲学となるよう願っています。